【論　　文】

素性共有と主語の位置に関して*

菅野　悟

1. 導入

本論文の目的は、主語の移動に関する近年提案された仕組みに従い、標準英語及び英語の諸方言を分析することにある。初期の生成文法の研究以来、主語の位置、及び、移動の要因が議論の対象となっている。そして、近年の代表的な論文であるChomsky (2013, 2015) において、主語の移動はラベル（label）を決定するために生じると主張される。ラベルとは構成素の言語特性を示す理論的構築物であり、2つの要素が併合（merge）した時どちらかの要素が投射されることにより形成される。

Chomsky (2013, 2015) はラベル決定の仕組みとして次の2種類を仮定する。

（1）a. $X^0 + YP \rightarrow$ XP（X^0, YP）　b. $XP + YP \rightarrow$ α（XP, YP）

（1a）は主要部と句が併合した場合であり、この場合、主要部が投射する。この理由は範疇決定の新たな仕組みである探索（search）による。2つの要素が併合した時点で探索が生じ、主要部X^0の方がYP内部のY^0よりも近い

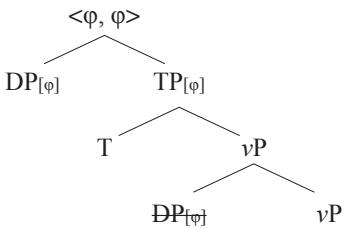
* 本学会の匿名の査読委員に謝意を表す。もちろん、残る不備・遺漏は筆者一人に帰せられるべきものである。なお、本研究の一部は平成27年度科学研究費補助金若手研究（B）「素性継承による言語の類型と歴史的変化の研究」（課題番号 26770169）の助成を受けたものである。

『英語と文学、教育の視座』204-216

要素と判断される。このため、主要部X^0が全体のラベルとなるように選択される。一方、(1b) は句同士が併合した場合であり探索により選ばれるのは2つの主要部となる。つまり、XP内のX^0とYP内部のY^0がどちらも近いと判断され、全体のラベルとなるαを決定することが出来ない。このような場合、ラベル決定の新たな仕組みが必要とされる。

Chomskyでは、このような場合いずれかの句が移動することによりラベルが決定されると仮定する。具体例として (2) を取り上げる。

(2)



(2) ではDPと*v*Pが併合した時点でXP+YPの構造になり全体のラベルが決定されない。この場合、DPが移動することにより全体のラベルが*v*Pと決定される。一方、DPは移動先でTPと併合する。この場合もXP+YPの関係となるが、両者に共通の素性φが存在するためDPとTPの間で素性共有 (feature sharing) が生じ、この結果、φが全体のラベルとなる。

この提案されたラベル理論に対し、次の点が明確にされるべき問題として生じる。

(3) 素性共有の対象となる素性は何か。
(4) 共有される素性がどの主要部に含まれるか。

本論の目的は、主に英語の様々な方言を取り上げ、この2点を明らかにすることにある。次節では標準英語を論じ、具体例を検証する。

2. 標準英語

この節では標準英語 (standard English) を論じ、(3) と (4) の問題を取

り扱う。標準英語における主語の統語位置を論じている研究としてKiss (1996) が挙げられる。Kissは（5）と（6）の対比を挙げ、英語の主語位置が2種類あることを主張する。

（5）Boys luckily know the novels of Karl May. (Kiss 1996: 129)
（6）a.??Boys luckily were born.
　　b.　Luckily boys were born. (ibid.)

（5）のように述部として一時的述部（stage level predicate）であるknow…が生起する場合、（裸）主語は副詞luckilyの前に生じることが出来るが、一方、（6a）のように個体述部（individual level predicate）であるbe bornが生起すると主語は副詞の前に生起できない。このため、（6b）のようにluckilyに後続する文のみが文法的となる。

Kissは様々な言語事実を用いて（標準）英語において2つの主語位置があることを論じている。その2つの位置として、次の構造を仮定する。

（7）[$_{RefP}$ DP [$_{TP}$ DP [$_{VP}$ *t* …]]]

Kissは特定的な（specific）解釈を持つ名詞句は上位の指定部（[Spec, RefP]）へ移動し、非特定的な（non-specific）解釈を持つ名詞句は下位の指定部（[Spec, TP]）に移動すると主張する。

このKissの主張が正しい限りにおいて、（3）と（4）に対する答えは次のようになる[1]。

（8）a.　標準英語において［specificity］が素性共有の対象となる。
　　b.　Refがこの素性を持つ。

（8）が示すように標準英語では数の素性が重要な役割を果たし、これが節全体のラベルとなることになる。さらに、この素性を持つ主要部はRefであると言える。

この節では、標準英語を取り上げ（3）と（4）を議論した。次節以降では様々な英語方言を論じ、それぞれの方言でどのような仕組みが関わってい

るかを示す。

3. ベルファスト英語

この節ではベルファスト英語（Belfast English）を取り上げ、標準英語と異なる条件が関与することを論じる。まず、ベルファスト英語において単数呼応（singular concord）と呼ばれる現象がある。単数呼応とは、通常、複数屈折を必要とする状況において単数形の屈折が生じる現象である。具体例として次の文が挙げられる。

（9）a. These cars go/goes very fast. (Belfast English)
b. The eggs are/is cracked. (Henry 1995: 16)

これは常に生じるのではなく、次のように主語が代名詞の場合には観察されない。

（10）a. *They goes very fast.
b. *They is cracked. (ibid.)

このような単数呼応に対しHenry (1995) は次の条件を提案する。

（11）単数呼応は明示的な主格がない名詞句により可能となる。

(9) の例において複数形名詞句は顕在的な主格は生じない。このため、単数呼応が観察される。一方、(10) では代名詞が主格の形式で生じているため、この現象が観察されないことになる。

この提案が適切であることは次の事実により支持される。

（12）a. Us and them is always arguing. b. *We and they is always arguing.
c. Him and me goes there every week. d. *He and I goes there every week.
e. Her and her mother works there. f. *She and her mother works there.
(ibid.: 18)

（13）Us students is/are going. (ibid.: 24)

（12）が示すように、ベルファスト英語では対格の代名詞が主語として生起可能であり、この場合、単数呼応が観察されるが、主格代名詞の場合この現象は不可能となる。また、（13）が示すように主語としてUs studentsのように明示的な主格形が存在しない場合、単数呼応が観察される。

さらに、単数呼応には統語的な位置の違いが関与していることは次例から示される。

（14）a. The children really are late.
b. *The children really is late. (ibid.: 19)

（14）のようにthe childrenが主語として生起する場合、明示的な主格が表れていないため単数呼応が原理的に可能となるが、副詞reallyがあると単数呼応が阻止される。これは副詞により上位の主語の位置が強制されるためであると説明される。

Henryはこれらの事実を説明するため、ベルファスト英語には2つの主語位置があると提案する。

（15）[$_{AgrP}$ nominative pronoun/full DP [$_{TP}$ non-nominative pronoun/full DP [$_{VP}$ *t* …]]]

上位の範疇はAgrPという名称が用いられていることからわかるとおり一致に関与する範疇であり、この位置に生じることにより主格が付与される。下位の位置もまた主語位置であるが、格は付与されない。

以上の言語事実を説明するため、本論文では素性［nominative］（=［Nom］）が重要な役割を果たすと仮定する。まず、Henryに従い統語位置が2つあると考え、AgrPには［Nom］が存在し、TPにはこの素性がないとする。また、名詞句も顕在的な主格が生じる場合、［Nom］を持つが、一方、顕在的な主格が生じない場合、［Nom］を持たないとする。この素性を持つ名詞句はAgrPまで移動し、AgrPの主要部と素性共有が生じるため単数呼応が生じない。一方、［Nom］を持たない名詞句はTPの指定部に生じ、単数呼応

を許す。このため、ベルファスト英語に関わる規則は（16）のようになる。

（16）a. ベルファスト英語において［nominative］が素性共有の対象となる。
　　b. Agrがこの素性を持つ。

以上示したように、ベルファスト英語においては、素性［Nom］が重要な役割を担うと仮定することにより、ここで示した言語事実を説明できることを論じた。

4. 黒人英語

この節では、黒人英語（African American (Vernacular) English）を論じ、標準英語やベルファスト英語とは異なる分析が必要であることを示す[2]。まず、黒人英語を観察すると、動詞の屈折要素はほとんど観察されない。次の例が示すように、動詞に屈折接辞である-sやbe動詞が欠如していても文法的となる。

（17）a. I/you/he eat/run
　　b. I/You/He/It/We/you/they eating/running　　(Green 1998: 40-41)

確かに、次の文においてbe動詞が屈折しているように思われるかもしれない。

（18）a. I AM eating/running
　　b. You (and all other persons) IS eating/running　　(ibid.: 41)

このbe動詞の屈折は1人称単数のみに限られ、かなり限定的であり、通常の屈折とは異なる。さらに、黒人英語にはI’mやIt’sのような表現が観察されるが、これらは、それぞれIとItの変異形であると考えられる（DeBose and Faraclas 1993）。

また、これ以外に随意的（optional）に観察される-sは他の英語方言とは異なり、屈折要素と分析されない。例えば、動詞に付けられる-sは談話上

の現在（narrative present）や習慣的（habitual）意味を表わすことが指摘されている（Green 2002）。

この事実を説明する論理的可能性として*v*Pよりも上位の範疇が欠如しており、主語は*v*P内部から移動しない可能性も考えられるが、この可能性は低い。つまり、黒人英語の場合も主語は*v*P外へ移動する。第1に、notよりも上位に存在する。

（19）a. I/you/he ain’t eating/running
　　b. I/you/he don’t eat/run　　(ibid.: 41)

第2に、動詞句削除、動詞句前置した場合、主語は当該の操作の適用を受けない。

（20）a. Becky might go to the movie, and Bruce might, too.
　　b. Becky said that she would speak to the teacher, and speak to the teacher she did.　　(ibid.: 61)

このため、黒人英語においても主語は元位置から移動していると考えられる。

以上示したように、黒人英語の言語事実として顕在的な一致形態素が欠如しているが主語は*v*P外へと移動していると結論付けられる。

本論文では、以上の言語事実を次のように捉える。まず、主語に対する統語位置を2つ以上想定する積極的理由はなく統語位置を1つとする。また、音声的に非顕在的なφ素性が素性共有の対象となると仮定する。これにより、この方言の特徴は次のようになる[3]。

（21）a. 黒人英語において非顕在的な［φ］が素性共有の対象となる。
　　b. Tがこの素性を持つ。

以上、黒人英語においては、標準英語やベルファスト英語と異なる仕組みが働いていることを論じた。

5. アパラチア英語とバッキー英語

この節では、アパラチア英語（Appalachian English）とバッキー英語（Buckie English）を論じる[4]。まず、アパラチア英語では、ベルファスト英語と同様、単数呼応が観察される。具体例として（22）を挙げる。

（22）a. Those boys {is/are} plumb foolish.
b. The potatoes {looks/look} awful.
(Tortora and den Dikken 2010: 1092)

ベルファスト英語と同様に、アパラチア英語において、通常、複数形の屈折をする状況において動詞は単数形の屈折を取ることが出来る。また、次例が示すように主格代名詞の場合も単数呼応が観察されない。

（23）a. They {*is/are} old friends. b. They {*plows/plow} their corn in June.
c. We {*is/are} old friends. d. We {*plows/plow} our corn in June.
(ibid.)

このようなアパラチア英語における単数呼応に対しては、主に2つの有力な分析が提示されている。第1に、Tortora and den Dikken (2010) が提示する階層的（configurational）分析である。Tortora and den Dikken はHenryの主張に基づき2つの主語位置を認め、その構造として（24）を提案する。

（24）[$_{\text{SubjP}}$ complex DP [$_{\text{AgrsP}}$ non-complex DP [$_{\text{VP}}$ *t*…]]]

しかし、ベルファスト英語とは異なり、アパラチア英語では主語に関し異なる条件が関与すると主張する。（24）が示すように、複合語（complex word）は構造上上位に移動し、単一語（simplex word）は下位に移動する。重要となる事例は（25）である。

（25）a. We’uns is planning a picnic.
b. We’uns is mighty good to our friends. (ibid.: 1093)

(25) では顕在的な主格を有する要素が主語として機能している。このような場合であれ、ベルファスト英語とは異なり単数呼応が可能である。アパラチア英語において単数呼応が可能な例である (22) や (25) は主語が複合語であり、一方、単数呼応が観察されない例である (23) では主語が単一語である。つまり、単数呼応は主語が複数語の場合に可能であり、動詞との一致はAgrsP内に主語が生じた場合のみであり、SubjectPに生じた場合は一致を引き起こさないと主張する。

Tortora and den Dikkenの分析に基づけば、主語に関する条件は次のようになる。

(26) a. アパラチア英語において［number］が素性共有の対象となる。
b. Agrがこの素性を持つ。

第2の分析はZanuttini and Bernstein (2011) が主張する非階層的分析である。この分析においては複数の主語位置を仮定しないが、一致にかかわる素性を人称（person）素性とする。このため (27) のようになる。

(27) a. アパラチア英語において［person］が素性共有の対象となる。
b. Tがこの素性を持つ。

この分析は、非代名詞の3人称主語の場合、人称素性が欠如しており -sが生じると主張する。つまり、(22) のような場合は -sが生じるという事実を捉えることが出来る。また、(25) のような場合はTはDP内部のN(uns) と一致するが、unsには人称素性が欠如しているため -sが生じるとする。

ここで2つの分析のうち、どちらが妥当であるかが問題となる。本論文では2つの理由によりZanuttini and Bernsteinの分析を採用する。第1に、Tortora and den Dikkenは2つの統語位置を仮定するが、その主張に対する強い証拠が欠如していると考えられる。Zanuttini and Bernsteinはこの主張を支持するため否定倒置 (Negative Inversion) を用いた議論を展開するが、説得力のあるものではない。第2に、Tortora and den Dikkenは上位のSubjectPには主語との一致が存在しないことを仮定するが、本論文の採用する枠組みに従えば、SubjectPと主語の間で［number］に関して一致が生じないこ

とになる。このため、節全体のラベルが未決定となり、派生が収束しないことになる。この2つの理由により、本論文ではZanuttini and Bernsteinの分析を採用する。

次に、バッキー英語に関し論じる。この方言においても（28）-（30）に示されるように、単数呼応が観察される。

（28）The mothers was roaring at ye comin’ in.
‘The mothers were shouting at you to come in.’
(Adger and Smith 2010: 1110)

（29）Nearly all the houses is bought with the English
‘Nearly all the houses are bought by the English.’ (ibid.)

（30）The quines has/have all gone.
‘The girls have all gone.’ (ibid.: 1117)

この方言において、wasはthey以外の複数代名詞とすべての非代名詞の名詞句に生じることが可能でり、-sは複数形の非代名詞のDPに対し生じることが可能である。

この事実を説明するため、Adger and Smith (2010) は特別な素性を仮定することなく、また、複数の主語位置を仮定することなく説明可能であるとする。ただし、この分析のためにTの持つ数と人称の両方の素性を精緻化する必要があると主張する。

このため、バッキー英語の言語事実を捉える分析として（31）を提示する。

（31）a. バッキー英語において［number］と［person］の両方が素性共有の対象となる。
b. Tがこの素性を持つ。

（31）が示すように、主語の統語位置はTPのみを仮定すればよいが、そのTP内の素性をより精緻化する必要がある。

6. まとめ

以上、本論文では近年提示されたラベル理論を提示し、それに対する解くべき問題を2つ提示した。その2つとは、第1に、素性共有の対象となる素性は何か、次に、その素性を持つ主要部は何かというものである。実際の例として、標準英語及び英語諸方言を論じた。それぞれの方言の仕組みをまとめると次のようになる。

(32)

	素性共有の対象	素性を持つ主要部
標準英語	specificity	Ref
ベルファスト英語	nominative	Agr
黒人英語	φ	T
アパラチア英語	person	T
バッキー英語	numberとperson	T

(32) が示すように、素性共有の対象となる素性とそれを有する主要部に関して、それぞれ大きく2つに分けられる。まず、対象となる素性の点では、意味素性を用いるか、統語素性を用いるかで2分される。一方、その素性を持つ主要部の点では、複数の主要部を考慮する必要があるものと単一のTPのみが機能しているものに2分される。

この点に関し、いくつか探求すべき問題点が生じる。まず、標準英語のみが意味素性を素性共有の対象とし、(32) の中では例外的となる。しかし、英語以外の言語において意味素性が主語の統語位置と相関することはよく知られている。このため、英語以外の言語を含め、より広範囲な言語を対象とし研究をする必要がある。第2に、複数の主要部を仮定すべきかどうかも英語以外の言語を考察する必要がある。特に、近年盛んに研究されているカートグラフィー理論では、複数の主語位置が仮定されており、この点でも英語以外の言語を分析する必要があると考えられる。最後に、(32) でまとめられた言語事実は獲得の事実を考慮すると問題となる可能性がある。例えば、例えば、黒人英語において対象となる素性がないということは子供に有意義な獲得上のトリガー (trigger) が与えられないことを示している。以上の3点の問題は、扱うべき有益な研究課題と考えられるが、今

後の研究課題とする。

注

1. 本論文では派生が収束するためには節全体のラベルが決定されるべきであるという考えに基づき、最上位の範疇が持つ素性に焦点を当てる。このため、(7) のTがどのような素性を持つかは今後の研究課題とする。この点に関し、査読者はKayne (1989) を言及し、Tに［number］がある可能性を示唆したが、特定的であれ、非特定的であれ、主語は数に関し一致を引き起こすため、Tのみが［number］を持つとは仮定しない。ただし、［specificity］を素性共有する際、［number］も一緒に共有する可能性がある。
2. African American (Vernacular) Englishは以前、Black Englishと呼ばれていたが、現在はこの呼称は主流である。訳語も「黒人英語」から変更する必要があると考えられるが、この名称が依然として広く使われていることを考慮し、本論文ではこの名称を用いる。
3. 査読者から非顕在的な［φ］ではなく、［number］である可能性を示唆されたが、いずれであるかは不明であるため、ここでは［number］を含む、より一般的な［φ］とする。
4. アパラチア英語は米国アパラチア地方で話されている英語を指し、バッキー英語はスコットランドのバッキー地方の英語を指す。

参考文献

Adger, David and Jennifer Smith (2010) “Variation in Agreement: A Lexical Feature-Based Approach.” *Lingua* 120: 1109-1134.

Chomsky, Noam (2013) “Problems of Projection.” *Lingua* 130: 33-49.

Chomsky, Noam (2015) “Problems of Projection: Extensions.” In Elisa Di Domenico, Cornelia Hamann, and Simona Matteini (eds.) *Structures, Strategies and Beyond: Studies in Honour of Adriana Beletti*, 3-16. Amsterdam: John Benjamins.

DeBose, Charles and Nicholas Faraclas (1993) “An Africanist Approach to the Linguistic Study of Black English: Getting to the Roots of the Tense-Aspect-Modality and Copula Systems in Afro-American.” In Salikoko S. Mufwene (ed.) *Africanisms in Afro-American Language Varieties*, 364-387. Athens: University of Georgia Press.

Green, Lisa (1998) “Aspect and Predicate Phrases in African-American Vernacular English.” In Salikoko S. Mufwene, John R. Rickford, Guy Bailey, and John Baugh (eds.) *African-American English: Structure, History, and Use*. London: Routledge.

Green, Lisa J. (2002) *African American English: A Linguistic Introduction*. Cambridge: Cambridge University Press.
Henry, Alison (1995) *Belfast English and Standard English: Dialect Variation and Parameter Setting*. Oxford: Oxford University Press.
Kayne, Richard S. (1989) “Notes on English Agreement.” *CIEFL Bulletin* 1: 40-67.
Kiss, Katalin É. (1996) “Two Subject Positions in English.” *The Linguistic Review* 13: 109-142.
Tortora, Christina and Marcel den Dikken (2010) “Subject Agreement Variation: Support for the Configurational Approach.” *Lingua* 120: 1089-1108.
Zanuttini, Raffaella and Judy B. Bernstein (2011) “Micro-comparative Syntax in English Verbal Agreement.” *Proceedings of NELS 39*, Vol. 2: 839-854.

（北海道教育大学旭川校）
kanno.satoru@a.hokkyodai.ac.jp